

2013年12月1日 主日礼拝説教(要約)

聖書 ルカによる福音書1章67～80節

説教「あけぼのの光の訪れ」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

クリスマスの出来事をたいへんていねいに物語るルカによる福音書は、そこにいくつもの讃美歌を記録しています。その中でも有名なのは、受胎告知を受け入れたマリアの歌う讃美(1:47～55)と、わが子をヨハネと名づけ、再び口が開かれたザカリアの歌う讃美(1:68～79)です。マリアの讃歌が、冒頭の「あがめる」というラテン語からマグニフィカートと呼ばれるのに対して、ザカリアの讃歌は、やはり冒頭の「ほめたたえよ」というラテン語から、ベネディクトスと呼ばれてきました。

「ほめたたえよ」というのは、口語訳は「ほむべきかな」と訳していましたが、讃美しなさいという命令形ではなく、「ほめたたえられてあれかし」という願望ないし、「ほめたたえられるべきである」という事実を表す言葉です。父ザカリアは聖霊に満たされ、まさに起ころうとしている神の救いの御業を預言しているのです。ところで、この歌は、終わり近く76節に「幼子よ」という呼びかけがあるものの、個人的要素はあまりなく、救い主を遣わされる神の救いの御業についての讃美が中心になっています。

詩の形をとっていますが、ギリシア語の文章としては次々と言葉がつながった長い二つの文章からなっています。68節から75節までが一つの文章、そして76節から79節までが一つの文章です。そして前半の文章をつくりあげている主たる動詞は過去形で書かれ、後半の文章をつくりあげている動詞は未来形で書かれています。

ところで、ザカリアが早速に歌い始めるのは、主なる神が救い主を送り、私たちに救ってくださったということです。けれども、考えてみれば、この時点では主イエスはお生まれになっていません。そうすると、過去形で語っているというのはおかしいのですが、これは預言者の文体によくある形で、まだ実際に起こってなくてもまさに起こるその出来事の確かさを力強く表すための過去形です。ザカリアは、一年弱の強いられた沈黙の間、不自由な中に身を置きながら、神がイスラエルに告げられた約束は決して忘れられていなかったこと、神の大いなる計画がまさに今成就するのだということを、爆発的な喜びと確信をもって告げているのです。

「主はその民を訪れて解放し、我らの救いの角を、僕ダビデの家から起こされた」(68～69節)。ザカリアは、神がダビデの子孫から約束どおり救い主イエス・キリストを遣わしてくださったことについて語っています。「主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる」(72節)。実は、ザカリアという名は、「主は覚えていてくださった」という意味をもっていました。彼は祭司として神に仕える身であり、神さまのことは誰よりも知っているつもりでしたが、わが身に起こった出来事の中で、生きて働いておられる神の臨在に目覚めさせられ、圧倒されたに違いありません。神は混乱に

満ちた暗闇の世界をお忘れになっていないこと、それを私たちもしっかりと思い起こしたいと思います。

歌の後半には、未来形の動詞が用いられていますが、まず生まれたばかりのわが子に対して、「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである」と語られます。主イエスの福音宣教に先立って登場した洗礼者ヨハネの働きは、人々に罪の悔い改めを激しく迫るものでしたが、それは人々が来るべき救い主によって、罪の赦しにあずかることができるようにするためでした。

「これは我らの神の憐れみの心による」（78 節）とあります。この部分は「われらの神の憐みの内臓（はらわた）による」という言葉です。岩波書店から出ている分冊聖書の訳は「われらの神の恵みの断腸の想いのゆえ」としています。そこからも分かるように、これはただの感傷や同情ではありません。神さまは、内臓（はらわた）を激しく揺り動かすような深い憐みによって、救いの御業をはじめられたのです。

最後に、ザカリアの讚美は再び救い主到来を告げて締めくくられます。「この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和に導く」（78～79 節）。ここで「あけぼのの光の訪れ」と美しく訳されているギリシア語はアナトレーという一語で、太陽、月、星など天体が昇ることを表す言葉でした。それは天体が昇ってくる方角を指す言葉ともなりました。「わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」（マタイ 2:2）というところでも使われています。そして、このアナトレーは、「わが名を畏れ敬うあなたたちには義の太陽が昇る」（マラキ 3:20）とか、「ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がる」（民数記 24:17）といったように、旧約聖書の時代から救い主の到来の比喻として使われてきました。

義の太陽のように、一つの星のように、出現されるそのお方は、「暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く」（79 節）のです。朝の光がすでに私たちの中に差し込んできています。まだ谷間の町にはその光は届いていないかもしれません。雨戸や厚い扉に閉ざされた部屋の中ではまだ誰も気づいていないかもしれません。しかし、イエス・キリストの到来は、私たちを罪と死から救い、まことの平和の道へと導いてくださるのです。

私たちが信仰をもって生きるとは、もはや闇にのみ込まれることのない朝の光の到来に気づき、この確かな光のもとに歩むことによって、それを告げ知らせることなのです。